

衣類などのリユースショップを資源に 太陽光発電所作り

特定非営利活動法人 エコメッセ しん どう きぬ よ 新藤 絹代

1 転機となったチェルノブイリ 事故

少しでも安全な食べ物を子どもに食べさせたいと生協に加入していたが、1986年に思わぬ事件が起った。生活クラブ生協のお茶は三重県の度会わたがひで作っているが、その年採れたお茶から通常を上回る1kgあたり227ベクレルの放射能が検出されたのである。これは国の基準の370ベクレルよりは低く一般市場では安全といわれるものであるが、生活クラブ生協では国の基準より厳しい自主基準37ベクレルを決めていたことから、このお茶は出荷停止になってしまった。その年の4月26日に起ったチェルノブイリ原子力発電所の事故により、はるか8,000kmはなれた日本にまで汚染が広がっていたのである。お茶は5月に刈り取られるので、刈り取り前に降った雨に放射能が含まれていたと考えられる。お茶の生産者は、これまで農林大臣賞を何度か受けた茶づくりの名人といわれる方である。土づくりから水にまで気を配ってお

茶を作ってこられた。私も洗って使うことのできないお茶の安全性にはこだわりがあったのである。

ひとたび地球上のどこかの原子力発電所で事故が起れば、自分だけで安心・安全な食べ物は作れないのだということに気がついた。当時は、干草ではなく牧草を食べた牛の牛乳、ハウス栽培より露地栽培の野菜に、より多くの放射能が検出され、まさに青天の霹靂という気がした。原子力発電所をなくさない限り安全な食べ物はないと気がついた。

2 環境団体エコメッセの設立

けれども私たちが今の快適な生活を変えない限り、多くのエネルギーを使い電気や石油・原子力に依存した生活が続いていくであろう。そこで、石油や原子力に代わるエネルギーとして、太陽光や風力などの自然エネルギーに変えていけば、限りある原子力や化石燃料に依存する生活を変えられるのではないかと思い、地域の身近なところで自然エネルギーの普及と、省エネルギーを広げる活動を

始めた。ドイツが脱原発から再生可能エネルギーへの変換を法律で決めた動きや市民の電力会社を作る運動を知り、勇気を与えられた。

活動には、「人」と「お金」が必要である。「人」はこれまで生協活動をともにしてきた仲間と呼びかけた。資金源としてリユースショップを開くことで、資金を得るだけでなく、衣類や雑貨のリユースを通じて「もの」を大切にすることも提案でき、地域での情報交換も、店という場でできるのではないかと考えた。これは以前滞在したイギリスのNGO OXFAMの活動にヒントを得たものである。

店の屋号は『原子力発電所』に対して『元気力発電所』とした(写真1)。

3 リユースショップ 『元気力発電所』から見た 衣類リサイクル事情

店を始めてすぐに気付いたことは、いかに各家庭に着なくなった衣類が多いかということである。何10年経ったと思われるものもある。皆さん、ごみとしては捨てがたく保管しているが何年も着ていない。人にさし上げるのも好みがあるし、失礼かも。そんな時、われわれの店に持って行くと何やら役に立てていただけるという『良いことした感』があるのではと思っている。

われわれの店はすべて寄付によるものである。よくあるリサイクルショップと違い、買い取りでもなければ委託でもないの、当



写真1 現在の「元気力発電所」関町店

初はものが集まるか心配したが、思った以上に地域の環境活動に使いたいという趣旨を理解していただけたようで、寄付でもいろんなものがたくさんいただけた。買い取りや委託だと、昔の『質屋』のイメージだけれど、この店で自分がささやかながら社会の役に立っているという気持ちも味わっていただけなのである。買ってくださる人も、買い物をしたという人間としての欲望を低価格で満足でき、普段着ないような色やデザインの装いを試してみるなど冒険もできる。しかも売上の結果が地域の環境活動『市民発電所建設』という目にみえた形になる。

だから、ここで買うのよという方も、全員ではないにしてもいられる。

一方困ったことも出てきた。すべてものが、季節に合わせて順調に全部売れるわけではないので、残ったものをどうするかという問題である。リユースショップは1点もの、良いもの、気に入ったものを手に入れたいお客さんは毎日のように店を訪れる。そのような人々のために同じものを長期間展示しておくわけにはいかないことに気付いた。そのため練馬区内に3店舗作り、それぞれの店のものを循環させることもした。けれ

ど季節により必要とされる衣類は違い、売れないものは季節外れになっていく。一旦家庭からもらった衣類はすでに事業のための品物で、処分するときは産業廃棄物となる。独自のルートを開発するべくわれわれのNPOを超えた衣類の循環システムの必要に迫られた。回収業者を選ぶときにも、まずは回収されたものがその後どうなるのかが気になる。

最初にあたった産業廃棄物処理業者は集めたものは燃やすとの答えで同意できなかった。次に生協の委託先の古布回収業者に連絡をとり、集めた古布がウエスやパッキング材料として、再びリサイクルされていることを確認し回収してもらうことになった。次の年にも、また展示できそうな衣類は保管している。エコメッセは現在(2010年12月)東京都内に13店舗あり、全店舗で使う大きな倉庫を借り季節外のをを保管している。

またエコメッセ内で、使えるものに再生するリメイクチームを作り、マフラー、エプロンなどを製作、販売している。なるべく使い切りたいとの思いからであるが、事業としてどこまで採算が合うのかこれからの課題でもある。

4 さいごに

大量生産、大量消費が豊かさだと考えられた時代を経て、持続可能が謳われ、今また良いものを大事にということを考える人たちが増えていると思う。衣類の素材一つとっても、人に優しく、リユース、リサイクル、リメイクしやすいのは天然繊維である。店で売れやすいのも、そういった素材のものである。最後まで地域全体で端切れなどとして使って衣類、繊維類もごみとして出されるのをゼロにしていきたいものである。

リユースショップ『元気力発電所』の売上で作った市民発電所は区内の大学、幼稚園、小学校と3号機までできた(写真2)。今年度中に4号機を保育園に設置する事が決まった。

「皆さんの寄付とお買い上げでできた皆さんの発電所です」と来店者に報告をしている。今後も身近な地域で目に見える環境活動を続けて行きたい。合い言葉は「エネルギーも食べものも地産地消」。

(廃棄物資源循環学会誌 第21巻、
第3号、pp.179-182、(2010)に
関連記事掲載)



写真2 市民発電所3号機「三育」(東京三育小学校屋上)